

竹本・川井両教授編の本書を一読して、深い感慨に打たれました。

もう10年も以前のことになりますが、著者の1人津田君と彼の同僚、青木君が、私と職場を共にしておられました。そこで、色素撒布による内視鏡検査の研究に取り組んで、苦闘しておられるのを眼のあたり見ていたのです。

忘れもしません、苦心が実ってようやくこの方法の有効性がはっきりとしたときの、両君の嬉しそうな顔を。

また、大阪成人病センターの方がコンゴローレッド法をやりはじめたと聞いて、シマッタ、一足先きにやられたと……気持の良いパンチを顔面に喰らったような気持になったことも、つい最近のように覚えています。

実は私もずっと以前、軟式胃鏡を用いながら、ニウトラールレッド注射で胃体部細胞の分泌能力を観察できないものかと試みたことがあったからです（これは完全に失敗しましたが）。

□書 評□

「色素による 消化管内視鏡検査法」

〔編集〕

竹本 忠良 東京女子医科大学教授

川井 啓市 京都府立医科大学教授

早期胃癌検診協会中央診療所所長

近藤 台五郎

それこれ考えますと、このように立派な、実り多い内容を持つ本ができたことは、全く夢のような気がするのです。

本書の分担執筆者が、この方面で世界的レベルでの第一人者、最も尖端を行くパイオニアであることは申すまでもありません。

どの頁を開いても自らの力で新しい道を切り開かれた方々の、自信と

深い洞察の、生き生きとした息吹きが読みとれます。頭だけではなく、自らの手を汚して泥まみれになった人でなければ、このような書き方のできるものではありません。

個々の内容については、ここで今さら私がとやかく記す必要はないでしょう。

竹本・川井両教授の周到な配慮の下に編集された成果が、どれほど読者の理解を深めるのに役立っているかについても贅言を要しません。

過去は現在につながり、現在は未来につながるものでなければ、われわれの仕事の価値というものは考えにくいと思うのですが、本書は、われわれに、現在の最尖端の知識を供給するばかりでなく、この検査法の将来の発展の方向をはっきりと示しているといつてよいでしょう。

いやしくも、内視鏡検査に少しでも関心を持つものにとって、見逃すことのできない良書だと思います。

B5 頁180 図48 写真43

原色図214 ￥16,500 ㇔200
医学書院刊